

第12次ブータン訪問団 報告

京都大学理学研究科 数学・数理解析専攻 修士2年 西辻裕紀

私たち第12次ブータン訪問団は、2014年2月19日から2月25日までブータンに滞在した。この滞在を振り返って、思い起こすことを率直に書いてみようと思う。

私にとってこのブータン滞在は肩肘を張らずに過ごせる時間であった、と思いついて感じる。それは安心して過ごせるという事と同義ではない。慣れぬ土地であるので不安になるのは当たり前ではあるが、信号機がなく、「1.5車線」と呼ばれる道幅の狭い道路がもたらす交通事情や日本と比べるとどうしても心許ない衛生事情。特に、「狂犬病を持っているかもしれないので近づかないで」といわれていた犬が至る所に居た事には私は不安を感じざるを得なかった。



しかし、それでも今私はブータンという国に落ち着いた感情を抱いている。その原因となる事象とその理由を断定する事はできないが、心に引っ掛かるものを羅列してみる。

まずは人。とにかく道中出会う人との、心の距離が近いと感じた。バスに乗り風景を眺めていると、外からこちらの顔を見る子ども。その時手を振ると、満面の笑みで手を振り返してくれる子どもがいる。もしくは雑貨屋さんで、細かいおつりが払えないのでキャンセルで許してね、という店員さん。それでいて、ブータンでは強引さや強い自己主張よりもむしろはにかみや周囲への配慮を認める場面を多く感じた。

また、人々に対する親近感の故か、彼らが信仰するブータン仏教に対しても何かしらの心休まる感情を覚えた。所々にある色とりどりの布ルンタや経文を収めたマニ車は異文化へ

の理解しがたさからくる不安感よりもむしろこんこんと湧き出る純粋な思いを感じた。
そして、ブータンの動物たちもまたこの国の雰囲気をも分に作り出している。道々で出会
う犬、猫、牛たちの眠たそうな表情、人なれした動作ももちろんそうであるが、私には「動
物が人間の生活の場で共に生活している」事そのものが一種の温かい感情を生むものであ
った。(犬を怖がる私は少し複雑な心持ちであったが)



また、ブータンの食事は私には合っていた。主食は米であり、少し油物が多いが、チキンの煮物や野菜炒めなど出される料理は日本で出てきても違和感のないものも多かった。独断で述べれば、現代日本の料理にチーズ、バター、唐辛子を多く使ったようなものであった。もっとも、私が食べたものは多くが旅行者向けのもので本当はたとえばもっと唐辛子が使われていたりするのかもしれない。



そして、私がブータンで最も感銘を受けたのはその大自然に対してであった。ブータンはヒマラヤ地域にその国土を預けている。そのような国を移動すると、山を越え峠を越えても、目先に広がるのは連々と座す山脈である。そんな山々は、時に白い幹の林を持ち、時に草花を生い茂らせ、時にその赤茶けた山肌をさらしながら、雨による浸食作用や辺り一帯に広がるもやといったダイナミックな自然現象を受け止めていた。また、日本の都市部では存在しない「距離感」がここにはある。眼前に広がっている物体は、数 km 先に存在している。それほど、私とその先にある景色との間には「何も無い」のである。ここに私は、「自然の本気」とでも表現するしかないものに、畏敬の念を抱くに至った。



月並みかもしれないが、私はブータンからこれらの感想を得た。一方で、ブータンの今後については見当をつけることが難しかった。現在のブータンは昔の日本にたとえられる事がままある。田を耕しながら生活し、地域の人々との交流も健在である。しかし、昔の日本と大きく違うのは、テレビやインターネット接続機器などを用い世界中の情報を得られる所である。私は、このヒマラヤの大自然に囲まれたブータンに飛行機で訪れ、バスに乗り山々を旅した事と合わせ、ブータンに現代のテクノロジーと歴史ある暮らしの絶妙なハイブリッドを感じた。私の中の感覚ではこれらが両立し、安定状態をとってこのまま時が経過することの想像が難しい。ブータン国内でこれから社会がさらに情報化され、多くの国民が自分たち以外の世界の情報を得ていった時、国民はどのような生活を欲するか、彼らにとってどのような生活が選ばれるべきなのか、私にはわからない。

たとえば、テクノロジーに代表される「効率性(もしくは有効性)」と、ブータンの文化、歴史、自然という「特殊性」は、両立しうるであろうか。ヒントは、「効率性」というものを地域ごとの特殊性を前提としてとらえる事であろうか。即ち、地理や文化などの前提条件が違えば、当然その条件下での物事の最適化の結果は異なりうる。「状況を無理に均質化する」事なく、その条件のまま最適化をかけることによって、地域ごとの特殊性すなわち多様性が保たれるのではないであろうか。もちろん、言うは易く行うは難しいもので、各前提条件のもとで最適化を与える方法をゼロから考えるための労力や、試行錯誤の余裕がどれだけとれるかは外部から意見を投げるだけでは把握できない。

そして、私はブータンを旅するにつれもっと日本の事を知る必要性を感じた。現在のブータンのような地域は、たとえば日本でも都市部を抜け出せば存在するのかもしれない。そして、私はこの旅でブータンの人々もしくは社会の考え方や常識、またなぜそれらがそうであるのかを掴みきれなかったが、思えばそれは私が24年間過ごしてきた日本に対しても同じなのである。私は異国に旅をすると、「異国」の理解の難しさというよりもむしろ「他人」の理解の難しさが問題なのであると実感する。

最後になりましたが、このブータン訪問は京都大学教育研究振興財団の助成により京都大学ブータン友好プログラムの派遣事業として実現しました。この訪問を実現させて下さいました京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生、酒井道子様、京都大学東南アジア研究所の松林公蔵先生、藤澤道子先生、京都大学こころの未来研究センターの熊谷誠慈先生、京都大学農学部の谷悠一郎くんをはじめ関係者の皆様に深く感謝いたします。

また、この訪問で私が肩肘を張らずに過ごせたのは、私を快く受け入れてくれたブータン

訪問団のメンバー、私の数多くの質問に答えてくれながら誰よりも旅を楽しんでいたガイドさんとドライバーさん、そしてこの訪問に関し一切合切のお世話をして下さり、それでも私たちが自由に行動させて下さった京都大学東南アジア研究所の坂本龍太先生と共に滞在できたからであると思います。本当にありがとうございました。

